

令和八年五月度 御報恩御講拝読御書

秋元御書

弘安三年一月二十七日

五十九歳

器うつわに四よつの失とがあり。一いちには覆ふくと申もうしてうつぶけるなり。又または
くつがへす、又または蓋ふたをおほふなり。二にには漏ろうと申もうして水みずもるなり。
三さんには汗うと申もうしてけがれたるなり。水みず浄きよけれども糞ふんの入りたる器うつわ
の水みずをば用もちふる事ことなし。四しには雜ぞうなり。飯はんに或あるいは糞ふん、或あるいは石いし、或あるい
は沙すな、或あるいは土つちなんどを雜まじへぬれば人ひと食くらふ事ことなし。器うつわは我われ等らが
身心しんしんを表あらはす。我われ等らが心こころは器うつわの如ごとし。口くちも器うつわ、耳みみも器うつわなり。

令和八年五月度 御報恩御講 『秋元御書』

(御書一四四七等五行目く八行目)

【通釈】

器には四つの欠陥がある。一つ目は「覆」といつて伏せること。または逆さにする、または蓋を覆うこと。二つ目は「漏」といつて水が漏れること。三つ目は「汗」といつて汚れること。水がきれいでも糞の入った器の水を使うことはできない。四つ目は「雑」。飯にあるいは糞、あるいは石や砂、土などを混ぜたならば人が食べることはできない。器は私達の身心を表している。私達の心は器のようであり、口も器、耳も器である。

【主な語句の解説】

覆フクく・漏ルる・汗アう・雑ゾウぞう…覆う、漏れる、汚れる(汗ア汚)、雑ゾウまじるという器の四種の状態のことで「器の四失(しつ)」「破器の四失」ともいう。転じて、仏道修行の妨げとなる衆生の状態や性分を表したもの。天台大師が『法華文句』に「過去の根こん浅く、覆漏汚フクロウ雑ゾウし、三慧生さんけいぜず」(学林版法華文句会本上三〇二)と説いたことに対する、妙楽大師の「聞慧無きが故に器の現に覆るが如く、思慧を闕かくが故に器の已に漏るが如く、修慧無きが故に器の汚雑せるが如し」(法華文句記・同右)との釈に由来する。

【背景と大意】

本抄は、弘安三(一二八〇)年一月二十七日、日蓮大聖人御年五十九歳の時、身延から、下総国印旛郡(千葉県)に住む秋元太郎兵衛尉に与えられたお手紙です。筒型の器(筒御器)や蓋さかずきの御供養に対する返書であり、「筒御器抄」との異称があります。秋元氏は富木常忍の親戚筋とも言われ、太田乗明等とも親交がありました。

本抄では、最初に器の御供養への感謝を述べられます。

次に、拝読の御文では器の四失を説いて、兵衛尉に我見や謗法に陥ることなく信心を全うするよう指南されます。続いて、念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊の「四箇の格言」をもって、念仏をはじめ諸宗の悪法を破折された結果、これまで誰人も受けたことのない甚だしい怨嫉おんじつを招いたことを明かされています。

さらに、謗法には謗人・謗家・謗国の三義があること、謗法を看過すれば与同罪は免れないことを説かれます。最後に、重ねて御供養への謝意を示し、本抄を結ばれています。